

初代薬局長・院長夫人

柴田 勝子(シバタ カツコ) プロフィール

1915 年（大正 4 年）2 月 7 日

～1981 年（昭和 56 年）9 月 27 日（享年 66 歳）



【経歴】

帝国女子薬学専門学校（帝国女子薬専）

【現：大阪薬学専門学校】 卒業

【薬局長として】

柴田外科医院は 19 床の有床診療所であったため、薬局長としての薬剤管理・調剤業務に加え、診察の介助、入院患者の献立作成など、多忙を極めた。そのかわり、4 人の子供には、日本の伝統文化を中心とした躰・教育に力を入れ、子育てを行うという万能ぶりを発揮した。

激動の時代、激務を完遂するための苦労が大変なものであったことは、想像に難くない。

【文化人として】

茶道（表千家）、華道（草月流）、日本舞踊（花柳流）、三味線、琴、俳句、俳画（赤松柳史門下）、などの日本の伝統芸術を愛し、素人ながら審美眼には光るものがあつた。

また、漆器・茶器、掛け軸、美術品などの手入れはことさら丁寧で、その取り扱いには、定評があつた。

また、文化人としての活動ばかりでなく、学生時代は山岳部に属し、紀泉アルプスへの登頂、六甲から宝塚までの遊歩などを好み、晩年は、熊野三山から那智の滝を巡るなど、活発な面もあつた。

【句集・八雲について】

柴田勝子は、昭和 43 年頃から本格的に句作を始め、『砂丘山口支部』と『山口市医師会榎野句会』の同人として、四季の折々にふれては投稿し、雅号は当初『翠彰』を頂いていたが、昭和 54 年より、『八雲』に改めた。

『や雲立つ 出雲八重垣 妻隠みに 八重垣作る その八重垣を』と須佐男命（スサノオノミコト）が櫛名田比売（クシナダヒメ）を迎えて詠まれた古事記の中の一節から『八雲』としたという。

神話のふる里、出雲への憧憬は強く、出雲大社はもちろんのこと、その裏手にある八雲山や八雲の滝などの『八雲たつ出雲風土記の丘』を訪ね、八東郡にある神魂（カモス）神社や熊野大社へも参拝した。生涯の雅号となった『八雲』へ深い思い入れがあつたことが伺える。



[→【句集八雲】←はこちらから](#)